

---

**セミナー・コロキウム**

---

## 環境セミナー・環境学コロキウムの試み

### セミナー委員会

環境セミナーと環境学コロキウムの発端は、1995年6月29日（木）に開いた第1回県立大学環境科学部セミナーにある。この時、坂本 充学部長と樋口敬二中部大学教授が「環境科学への期待」というテーマに関して、それぞれの観念で講演をされた。ただ1995年度は、開学初年度ということもあって、セミナーのありかたはまだ確定していなかった。

1996年度にはいつからでも、セミナーのありかたについての議論を継続させた。その結果、環境科学部セミナーを、環境セミナーと環境学コロキウムに分けて実施することとなった。

環境セミナーは、本学の学生・教職員だけでなくひろく一般の市民をも対象として、身近な生活環境から地球環境にいたる広範なレベルの環境をとりあげ、環境を見る眼を養ったり、現在進行中の環境問題を理解していくことを目的に開催することとした。

1997年度には、すでに4回のセミナーを実施しており、その要旨を今回の学部報に掲載している。いずれも講演やレジュメをもとにして、セミナー委員会でもとめたものである。セミナーには、40～50名から多い時で160名あまりの参加者があり、講演後も活発な質疑が行なわれた。

環境学コロキウムは、環境科学部の教員が参加して実施するのを原則としている。これが構想された1996年度は、大学が発足して1年を経たばかりの時、教育や研究について教員間の共通の認識や共通の土台は、まだ形成されてはいなかった。そこでセミナー委員会でこうした点について話し合いを進めた結果、環境科学部のあり方をめぐる問題状況と教員各自の研究成果にかんする情報を交換し、相互の理解を深めていくことが重要であろうという結論に達した。

全国でも初めての環境科学部が発足し、これか

ら新たに環境学（ないし環境科学）の教育と研究を進めるにあたって、環境学にかんする各教員の問題意識を交流させ、所属学科を超えて研究成果を交換していくことを、環境学コロキウムの趣旨とした。

このようなコロキウムの性格を踏まえ、報告者には以下のような内容を主体として頂くよう依頼することになった。

- ・環境学についての考え方（環境学をどうとらえているか）を中心に報告する
- ・サブタイトルを「環境学研究のフロンティア」として、できるだけ当面する問題関心を中心に報告する
- ・できるだけ学科間にまたがるテーマを取り上げて報告する
- ・参加者の理解のしやすさも考慮して、できるだけフィールドに則した報告を重視する
- ・文部省科研費研究、財団等の奨励研究、学内特別研究などで、共同研究が行われたものを中心に学際的研究の成果を報告する。

こうした経緯ののち、コロキウムは1996年度後半から開始された。

試みはまだ始まったばかりなので、今後、関連分野からさまざまな問題提起をして頂き、幅広い議論を行ないたいと考えている。

環境セミナー（5月23日） 講師：内嶋善兵衛（宮崎公立大学教授）

### 農業・生態系への地球温暖化の影響

本年度は地球温暖化防止京都会議（気候変動枠組み条約第3回締約国会議）が開かれることとも関連して、地球温暖化の課題として農業・生態系への影響をテーマとした。地球の歴史上過去1万年間に経験しなかったような速度で気温が温暖化するという事は、地球上の動植物の生存そして人類の生活のすべてに大きな影響を及ぼすので、地球環境の劣化と私たちの生活を考えるにあたって、地球気候の温暖化と動植物・人間へのインパクトの評価が重要になる。具体的には、滋賀県の自然環境が暖かい南九州のようになり、欧州や北米などの高緯度、寒冷な地域では、温暖化によって農業・林業が恩恵をうけるが、熱帯周辺の高温

の地域では、気温上昇や降水量減少で干ばつ・砂漠化などがおきやすく、農業基盤をくずす可能性がある。そうなると、開発途上国と先進国間のいわゆる21世紀の「南北問題」がさらに大きくなることも考えられる。21世紀の気候変動に関しては依然として不確定性があるが、温暖化が進行したら、地球環境にどのような影響がでるかについては、評価しておく必要がある。というのは、これまでのさまざまな環境問題で、そうなるまでは遅いにもかかわらず、無作為に放置してきたむごい経験があまりにも多いからである。（この文は、報告とレジュメをもとにセミナー委員会でもとめたものである。）

環境セミナー（10月28日） 講師：水野信彦（愛媛大学名誉教授）

### 魚の生態と川の形 犬上川の河川環境保全にむけて

鈴鹿山地に源を発する犬上川は、滋賀県立大学のすぐ北を流れ、琵琶湖へと注ぐ清流である。その河口付近には、特定植物群落のタブ群落、絶滅危急種のハリヨ、タコノアシ等が生息していることが示すように、犬上川は琵琶湖流入河川の中でも自然が豊かな河川流域のひとつとなっている。この環境セミナーでは、「魚の生態と川の形」のテーマから見た犬上川の河川環境の保全にむけての課題、具体的には瀬と淵が魚にとっての多様性の要で、瀬は餌場・産卵場、淵は休息・避難場所として重要になるので、そのような多様な生物環境を保全する上での河川改修の影響などについて検討した。現在では残り少なくなってきた貴重な

自然環境をもつ犬上川でも、近年、洪水対策のための河川改修計画が河口域からすでに始まっているが、当初計画では自然環境の改変が著しいため、貴重な自然環境保全のための再検討をする時期を迎えている。そのためもあり、滋賀県立大学の学生有志は、犬上川の貴重な生物であるハリヨ生息池やタブ林などの継続的な観察をはじめ、環境保全のためのゴミ問題などにも取り組みながら、できるだけ犬上川の自然環境を保全するとともに、人間活動との共存を実現するモデル河川にするにはどうしたら良いかを考えているのである。（この文は、報告とレジュメをもとにセミナー委員会でもとめたものである。）

環境セミナー（7月11日） 講師：松井三郎（京都大学工学部教授）

## 地球環境問題解決のための宗教倫理と環境倫理の新しい関係

1992年ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された国連「環境と開発」会議は、地球環境保全に沿った行動をとるよう求めたアジェンダ21をまとめたが、このなかで人間と他の生物の关系到新しい方向を求めたことは、今までにない重要な点である。人間以外の生物にたいする保護の精神は、人類の歴史においてどのように形成されてきたのか。これを知るためには、「宗教倫理」と「環境倫理」の概念でまとめられる思想、価値観を比較検討する必要がある。

「宗教倫理」は、超越者（神）と人間の契約、あるいは超越者を介して人間と人間の約束として構成されている。「環境倫理」は、超越者を含むと含まないにかかわらず、人間が他の生物との関係において自らを規制するところが核心である。超越者、神あるいは宇宙真理の認識の仕方、宗教的立場に立つか、非宗教的立場に立つかが分かれる。認める場合、超越者の在り方は、世界の宗教で異なり、そこには4類型が認められる。

- A：唯一神の存在を認める。 キリスト教、ユダヤ教、イスラム教
- B：一見したところ汎神的であるが、最終的には唯一の宇宙真理（者）が支配することを認める。 ヒンズー教
- C：宇宙真理の真の理解者の存在を認め、それが多数存在することも認める。 仏教
- D：汎神的形態を認める。 儒教、道教、日本伝統神道、ほかにギリシャ・ローマ・マヤの宗教

これらの宗教はその特性に対応した「宗教倫理」をもっているが、「宗教倫理」と「環境倫理」の接点は、それぞれの宗教が自然をどのように位置づけるかにある。ここでは、とくに人間が他の生物を食料としてどのように関係づけるかに注目した。宗教によって、食材としての生物の扱いは3

種類に分かれる。

- A：主要な蛋白質の摂取を植物（豆類）に依存する。 ジャイナ教
- B：動物性蛋白質を食材とするが、自ら殺生をしない。 上座仏教
- C：動物性蛋白質を食材として利用し、自ら殺生する。 かなりの宗教がこれに属するが、ヒンズー教徒の牛、イスラム教徒の豚、ユダヤ教徒の汚れた動物、のように宗教によって食物にタブーがある。

食材という面からみて、宗教には生物の利用と禁止について固有の考えが古くから存在してきた。その理由を生態学的に考察すると、合理性をもっているものがある。

現在、先進国における食生活の豊かさは過度に向上し、それが過剰な動物性蛋白質の摂取による環境問題（農業による環境破壊の根元）を生み出している。地球環境の保全という点からみると、与えられた地域の自然環境と歴史的宗教の条件の下で、伝統的食材について地域ごとのベストミックスを考えることが必要である。

人間と他の生物の関係を問い直す原点は、食材としての生物の適正管理をはかる一方、食材ではない動物の軽視、無視、敵視、害獣化の考えを直すところに還元されよう。人間と他の生物が共存するために重要なことは、人間の側の既得権利の譲歩ではなからうか。人間は、他の生物の存在をどれだけ保障するのか 「環境倫理」の核心はここにある。そして、そのために他の生物存在の科学的な調査、理解、管理が必要となる。また、先進国の市民に求められているのが、ライフスタイルの変化であろう。

（この文は、報告とレジュメをもとにセミナー委員会でまとめたものである。）

環境セミナー（12月17日） 講師：高山龍三（京都文教大学教授）

## フィールドワークことはじめ 私の体験から

大学においては、基本的なものの考え方、アプローチの仕方といったいわば問題解決のための方法を身につけておくことが大切で、フィールドワークはそのための重要な手段となっている。

問題解決は、思考のレベル（頭の中）と経験のレベル（現実、現場）という二つのレベルの間の往復運動で進んでいく。まず問題提起をする。次に、問題解決のために何をすべきか、試行錯誤し、そのために必要と思われる情報を探検する。問題の起こっている場でデータ収集・野外観察を行う。そのようにして集められたデータを整理し、それを統合して、隠されている本質を探り、仮説を発想する。仮説採択後、推論し、仮説検証のための実験準備、実験計画を立て、あるいは数式化し、実験観察、計算を行い、その仮説の検証をし、結論に達する。

このうち、情報・データの探検から、野外観察・情報収集、整理・統合して、仮説発想をする方法は、今までなおざりにされてきた。この仮説発想の方法を主とする科学を野外科学とよぶが、ここでいう「野外」は、大自然のみをさすのではない。それは、複雑な条件をもった、ありのままの現実世界つまり「現場」のことをいうのである。野外科学の必要性は、以下のようにまとめることができる。

- 生の資料を集める
- 知識としての理解だけでなく、経験学習が必要
- ひとまとまりの仕事（全部の経験）
- 総合力をつける
- 情報の総合・創造

こうした野外科学すなわち仮説発想の方法論を重視する研究や問題解決にあつて、フィールドワークはきわめて重要である。

現場での情報の集め方には、ある程度の技術の

修得が必要になる。ここでは、そのうちのいくつかの点について述べておこう。

まず、相手の身になって聞くことが大切だ。「暖かい心と冷静な頭」をもてということである。調査対象となる人は、素直に事実を語ってくれる人がよい。偏った情報にならぬよう、情報源のバラエティも必要である。そして、聞いたことはできるだけ目で確かめること。また、相手の答えが「建前」をいっているのか、「本音」をいっているのか、区別することが重要だろう。そのためにも、質問は多角的に行う必要がある。

集めた情報は、自分も含め、誰でも使いやすいように整理する。それを組み立てて、新しい情報を創造するためにも、情報の単位化・要約化を必要とする。そのためには、カード化が有効だろう。

情報をカードにするには、一単位ごとに切断する。どれだけを一単位とするかは、いちがいいにはいえないけれども、ひとまとまりの内容としておこう。わからないときは、要約してみるとよい。要約ができるようであれば、一単位であるといえる。カードには、その情報を採集した、とき、ところ、出所、採集者、の4項目をかならず記入しておく。カードにするときは、他人が読んでもわかるように、完全な文章で書かなければならない。

カードには、本文を書いたあとで、「見出し」の機能を果たす一行サマリーをつけておく。それはかたい漢語ではなく、形容詞や動詞もフルに使ったソフトな表現がよく、一単位の情報の内容を的確に表現していることが望ましい。その後、カード化した情報を整理・統合し、仮説を発想するというプロセスがくる。これについては、KJ法を参考にされるとよいと思う。

（この文は、報告とレジュメをもとにセミナー委員会でまとめたものである。）

環境学コロキウム（3月4日） 講師：末石富太郎（環境社会計画専攻）

## 環境工学 環境科学 環境学 地域学

### 1. はしがき

筆者は、京大衛生、京大経研、阪大環境、京都精華大人文、滋賀県立大環境と、狭義/広義の「環境」を謳う学科・部門・学部・大学の立ち上げにかかわった。科学とは相容れない環境計画分野での経験は『学部報』第1号に書いたから併読頂きたい。

上記の経緯の中で実現はしなかったが、実に多くの esquisse をした。目標は常に「環境学の体系化」であったが、体系の軸組みは、elite大学 universal 大学 university extension の方向と、それに対応する大学機能の編成であった。

### 2. 阪大環境工学科の創設（1968～）

この学科創設の着想は新津靖（現名誉教授）の独立学部構想にあり、筆者は京大から横目で眺めていた。事後処理の工学または大気・水圏などの汚染分析に重点をおいた衛生工学に比べ魅力いっばいで、できれば環境計画学を担当したいと打診したが、逆に滋賀県栗東に民間篤志家が「環境大学」を創るという相談を受けたり、京大経研の「環境経済学」部門創設の研究に関わるなど、公害時代の次を睨んだ構想が出始めた時期でもある。

阪大では結局、学部内の流用可能ポストにまつわる力関係で、6講座の学科にとどまり、筆者の赴任にも、騒音の講座を水資源工学に変更する窮余の策が必要であった。

### 3. 阪大独立研究科の構想（1976～）

建築・機械・水質など相当異質な分野の出身者で固めた阪大環境で、筆者は他講座の助教授を照準に協同研究を推進し、新津構想をより充実した形で実現するため、北大や筑波大の「環境科学研究科」を対照にしながら、体系化のための施設運用法、今日でいう市民研究を見すえた hard/soft にわたり、高度化・総合化などの無意味な名辞を使わない大学院構想を、川崎清と協同で検討した。keywords が「環境主体としての地域活動」「目的

設定のための科学」「合意形成の科学化」であった。

研究科を原論系・計画系・保全系に3分割し、これと「社会環境構造学」「環境計画学」「自然環境構造学」「環境保全工学」の4専攻を交錯させる形に集約し、文部省の事前了解もえたが、学内順位を上げる努力が足りなかった。

これと平行して、学会が細分化しかつ同業者集団になり下がる傾向を痛罵した村上陽一郎の論文（現在FW の全体講義に引用してある）も参考に、6人の教授全員が脱専門をはかり、連名で「環境原論」を用意し、新入生への楔型教養科目とした。

### 4. 地域学研究科の構想（1980～）

環境論議は平板化し、右肩上がりの大学拡充計画が横行する状況を脱すべく、また全学合意の必要上、筆者が代表となって「地域学研究にもとづく新しい大学機能の編成」研究の全学組織をつくり、「地域と大学の interface（情報 network）」「研究施設の機能と意義」「超大型都市模型（生物・物理・化学現象とcomputer system）」をkeyに、理論研究と掛川（最初の生涯学習都市）での case study をした。これを地域学研究科構想の下敷とし、下の16分野の文部省概算要求や阪大100周年計画への提案を書いた。

原論系：地域学原論 比較地域学 産業技術史 環境思想史  
基礎系：自然生態学 人間生態学 環境保全論 環境計画学  
装置系：環境教育論 環境情報学 環境行動学 地域システム学  
臨床系：地域意匠学 地域計画学 物質循環学 地域経済学

この計画も実現しなかったが、偶然吹田市から冠講座提供の申し入れがあり、上記構想の第一歩として、都市生態学、都市代謝学、環境社会システムの小所帯のセンターを計画、これを学部長は認めたのに、事務局は前例がないとして拒否した。1992年に開設された「(財)千里リサイクルプラザ市民研究所」は、このような系譜の延長上にある。

その後2年間、筆者は "global architecture" の大学院構想（船舶海洋・土木・建築・環境）の主査もつとめた。これは今ようやく日の目をみたらしい。

環境学コロキウム（4月25日） 講師：坂本 充（環境生態学科）

## 環境科学における自然と社会の接点；課題とアプローチ

### 1. はじめに

滋賀県立大学の環境科学部は、自然と調和のとれた持続的社会的システムの建設を目指して、環境問題について総合的理解と専門的知識・技術を有する人材育成に焦点を置き教育研究を進めている。従来、この課題についての専門的な学問体系は無く、本学部教員は多様な専門分野出身者で構成されている。今後、全教員協力して1つのまとまった環境学の学問体系を作り上げていく必要がある。ここに学部設立理念の復習とともに、環境学の課題とアプローチについて論ずる。

### 2. 環境科学の足取りと特色

環境問題の解決と環境と調和した持続的社会的創造を指向する総合的学問としての環境科学は地域文化学における環境問題との密接な関連分野を含め環境学として把握されることが多い。本章では環境問題に従来関わってきた自然・社会科学の成果を中心に話題を進める。

環境科学は、公害、それ以後の広域的環境問題への危機感、とくに人間生存への危惧から、人間・環境関係の問題解決の緊急性が国際学術連合により強く指摘されたことに出発する。わが国では、昭和40年前半の国際生物学事業計画、40年後半の人間生存にかかわる自然環境の研究を中心に各種の総合的研究が活発に進められた後、それらを集約、再編成する形で、昭和52年より環境科学特別研究、昭和62より人間 環境系の重点領域研究が進められ、環境問題の研究が大きく進展することになる。また、昭和62年に環境科学学会が設立され、環境関連研究者と研究領域の連携、人材育成の促進が大きく図られてきた。

昭和53年の学術審議会建議が示すように、環境科学は環境問題解決志向の学問であり、自然科学と社会科学を総合した学際的取り組みと、問題解決に適した新しい方法論開発が不可欠である。問

題解決のために、原因である人間社会と環境の間に生ずる自己矛盾を分析し、新しい調和を可能にするシステム造りが必要とされる。このため、人間の営みと自然の相互作用の包括的分析に基づき、自然環境を悪化させない社会システム造りを指向することが不可欠とされる。

### 3. 環境調和型人間社会確立のために不可欠な研究課題

上述の人間・環境系における相互作用の包括的理解、および相互作用と影響評価を人間の営みと関連づけ定量的に把握するためには、人間活動と自然機能をエネルギー、物質、水、情報の4つの流れによる定量的物差しで把握し、それら物差しによる人間・環境相互作用と環境影響評価の定量的把握が当面の緊急課題である。今後、代表的地域を選び、本課題について環境人間関係の総合的・地域研究の遂行が強く望まれる。

地域の人間・環境関係の定量的データ解析にあたり問題となるのは、人間と環境の構成と機能に地域差があることで、この地域性を考慮にいれての相互影響の解析が必要となろう。地域の活動と環境影響は社会サイズ（人口、生活内容、経済活動、流通）で大きく左右されるが、それら社会要因影響を環境影響解析にどのように取り入れるかについては、学問発達は十分でない。また、地域社会の環境影響は、社会の置かれている経済、文化、歴史環境により大きく左右されるが、それらについての知見の発達も十分でない。これら社会学的、人文的要素をも取り入れた総合的・地域環境学の進展が強く望まれる。

環境学コロキウム（6月25日） 講師：林 昭男（環境・建築デザイン専攻）

## 統合化の方法としての「エコロジカル・デザイン」

「分化」から「統合」へ

本学の環境計画学科では、環境科学をテーマにした新たなバックグラウンドのなかで、環境問題の解決をめざした研究と教育が課されている。

とりわけ、私の属する環境・建築デザイン専攻では、これまでの工学系や芸術系の大学で培われてきた建築デザイン教育とは異なるプログラムと内容が模索されなくてはならないと考えている。

そうした矢先、シム・ヴァンダーリンとスチュアート・コーアンの「エコロジカル・デザイン」という著作にめぐり合った時は、目から鱗が落ちる思いがした。シム・ヴァンダーリンとスチュアート・コーアンの「エコロジカル・デザイン」を貫くキーワードは「統合」ということであり、近代化、合理化のプロセスで何もかもバラバラとなってしまった今日の状況を止揚する有効な方法を示唆している。それは、デザインの根幹に「エコロジー」を据え、その上でいかにデザインすべきかを論じており、これまでのデザイン論を超えた文明論とでもいえるものになっている。21世紀も間近かな今、物質文明に修正を加え、“サステイナブルな社会”をつくるデザインのとるべき方向を指し示すものといっても過言ではない。

「エコロジカル・デザイン」とは

「エコロジカル・デザイン」とは、「自然のプロセスと統合することにより、環境への破壊的な影響を最小化するすべてのデザイン形態」と定義される。それは統合的で生態学的責任を負うデザインの分野である。「エコロジカル・デザイン」は環境共生型の建築・サステイナブルな農業・エコロジカルな工学などの分野で行われているバラバラな努力を結びつけるのに役立つ。「エコロジカル・デザイン」は、きわめて希望にみちたヴィジョンを持つと同時に、実際的なツールでもある。エコロジーをデザインの最前線に据えることに

よって、エネルギーや原料の使用を最小限にとどめ、公害をなくし、生物の生息地を保護し、コミュニティや健康そして美しさを育む特別な方法を用意し、デザインについて考える新しい方法を提供するものである。

「エコロジカル・デザイン」の5原則

これらの原則は、決定的なルールというよりも、創造のためのインスピレーションを意図している。

原則1．デザイン（解答）は場所から生まれる。

場所のもつ気候・風土・慣習の持続性をどう読みとるかが「エコロジカル・デザイン」の原点である。地域性 自然と文化 の尊重ということである。

原則2．エコ収支がデザインの方向を決める。

“生態系への影響評価”を基本において、デザインを考えることの大切さである。

原則3．自然のしくみに沿ってデザインする。

自然のもつしくみを壊さないで、それを尊重してつくらねばならない。自然との共生のためのデザイン原則である。

原則4．誰もがデザイナー

サステイナブルなデザインには多くの人びとの経験を必要とする。“参加のデザイン”の重要さということを意味している。

原則5．自然をきわだたせてつくる

五感を知覚化すること。つまり、視・聴・臭・味・触の感覚をデザインに盛り込むことの大切さである。

紙数が尽きましたので詳しくは下記の文献を参照していただければ幸いです。

### 参考文献

「エコロジカル・デザイン」

シム・ヴァンダーリン+スチュアート・コーアン 共著

林 昭男・渡 和由 共訳

ピオシティ発行

環境学コロキウム（11月27日） 講師：重永昌二（生物資源管理学科）

## 自然農法とガイア思想

今日の環境問題は、現代の科学文明の行きづまりの一つの姿として捉えることもできる。その打開には根本的な発想の転換や意識改革が必要であろう。この趣旨にそって編み出された自然農法およびガイア理論を紹介し、それらに見られる思想の共通性について考察した。

1．自然農法

自然農法は、有機農法に似ているがその基本的な考え方は同じではない。有機農法は科学農法の範疇に入るが、自然農法は近代科学を批判する思想から生まれた農法であるといえる。福岡正信氏（1913～）は自然農法の4大原則として、不耕起、無肥料、無農薬、無除草をあげる。また、自然農法における米麦作の基本的パターンとして「クローバー草生、米麦連続不耕起直播栽培法」を生み出し、徹底した自然中心の農法を推奨する。

2．ガイア理論

ジェームス・ラブロック（1919～）は、地球という惑星は「生命」のための「環境」であるにとどまらず、それ自体生きて有機体であり、自らの存続のために周囲の状況を修正してゆくシステムであるとする考え方の科学的説明を試みた。そして大気、海洋、気候、地殻が生命にとって快適な状態に保たれているのは、生きている有機体が行動するからであるとする。ガイアとはギリシャ神話の大地の女神の名で、ラブロックは生きものとしての地球にこの名を与えた。現代の人類にとって快適で都合がよいと考えられる状態は多分地球（ガイア）にとっては不快な状態であるとする。ガイアと人類の間で生きる価値や条件が異なるようになってきた原因は何かを問いつめ、地球環境問題の核心に迫る。

3．思想的背景の共通性

自然農法は無分別智により直覚的に自然を捉える所から始まる、哲学的・宗教的方法がその基礎に存在する。

ガイア理論は部分的・分析的研究から始まる科学的方法をとるが、例えば天文学におけるビッグバンなどの宇宙論のようなものではない。また土着文化のシャーマニズムのような、自然中心の信仰体系の延長上にあるものでもない。仮説から世界観へと移行したものと言える。すなわち地球を半ば「霊的」な存在として捉えようとする世界観、あるいは地球は「生きていて崇敬すべきもの」とする信条のようなものといえる。

これら2つの思想的背景にはかなりの違いがあるようにも見えるが、そこには次のような共通性が見られる。

1) 徹底した自然中心思想

自然ないし地球を生きものとして捉え、それ自体の完全性を是認し、その力に依存しようとする。

人類は本来自然なものでありながら、文明社会が進むと極端な人間中心思想に陥り、人類も自然からの離反を強めてきた。その結果環境が生きものにとって住み難いものになって行く。これをどう矯正すればよいのかという発端からそれぞれの理論が展開されるが、いずれも人間偏重を反省する自然中心思想に立つ。

2) 還元論を批判し、全体論の立場に立つ

まず対象を分析してからこれを組み立てて認識する還元論を排し、自然を分割不可能なものとして捉える全体論の立場をとる。

3) 試論の提唱とその実証

両者ともそれぞれの思想に基づく試論から出発し、これを実証する方法をとる。

4) 少数派

自然農法もガイア仮説も、経済への関わりに関心であるか、またはこれを無視する。むしろ経済発展を罪悪視するかに見える。このあたりが少数派であることの原因ではないか。